
妄想リアリティ

成茸 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想リアリティ

【Nコード】

N6161K

【作者名】

成茸 ハル

【あらすじ】

しががない高校生、日向《あきひひなた》瞳一は一般的で、普通で、凡人に位置づけられる高校生だった。

目立つわけでもなく、普通に友人と談笑をかわし、普通に部活動に精を出し、たまにはダラけ、一般の高校生と変わらず可愛い女の子に興味を持つ、そんなまったく特色を持たない高校生。

唯一人と違う点があるとするならば、彼は『妄想』という行動に酷く卓越していた。

彼は妄想をこよなく愛し、自分の意のままに変わる世界を楽しみ、

そして日常の「自分の思い通りには決してならない」世界に戻っていく。

彼の妄想力は具体的で、現実からおおよそ離れた設定ではなかったが、それでも現実の彼が置かれた設定とは程遠かった。

ある日、妄想の中で、一人の少女が死んだ。

次の日、その少女は、瞳の目の前で死んだ。

彼はそんな事は望まなかった。しかし、脳内の世界は、瞳の希望とは裏腹にひとり何処かへ歩いていってしまう。

妄想が、彼の理想を引き千切って、現実世界を描き始めている。何故妄想と現実がリンクし始めているのか、瞳には分からなかった。

作家の手を離れて、キャラクターが勝手に動き出すように。

既に、彼の頭の中の希望の世界は、彼のものではなくなっていた。

そんな中、彼の元と尋ねてきた一人の少女がいた。

その少女は、死んだ少女の妹だった。

もうそう、その1（前書き）

更新速度は速いほうなのだと思います。この作品は、どこかのライトノベル大賞へ応募するために書いていますので、比較的早いです。そして、この小説が完成するまで、赤いタマシイは更新しません。ごめんなさい。

ガールズラブ、といいますがほんの軽い描写だけなので、基本的には皆さんが楽しめるかと思えます。

人の死について書かれた描写が多々ありますので、そういう切なくなってしまうような描写を好まれない方はお控えしたほうがいいのかもかもしれません。

なお、読みやすく改行してはありますが、それでも文字が密集して読みにくかったり、変に難解な表現（こういうの。素直に難しい言葉って書けばいいのにね）があるとあります。そういう風味を出したい、と思っではいるのですが、極端に分からなかったり、気に入らないなーと思っただ点があれば、コメントなどで指示していただけるとものすごく嬉しいです。

再度言いますが、この小説の作者は本屋などで売っているライトノベルとなんら変わりはないレベルを目指して執筆しています。

まだまだ克服しなければならぬ箇所が目立ちますし、このままでライトノベル大賞が取れるほど甘い世界では決してありません。

もしよろしければ、感想やご意見などを寄せていただければ、これほど幸いな事はありません。喜んで、今後の参考にいたします。

では、長々としたものではありませんが、どうぞお楽しみくださいませ。

もつそう、その1

僕は、妄想が好きだ。

これだけ言ってしまうと、誤解が生じそうなので補足しておこう。

僕が述べている妄想は、どちらかといえば想像に近い妄想だ。

辞書で引いてみれば、妄想とは突拍子もないありえない現実を自分の欲望のままに想像する、というような解説が書かれてあった。

僕は、自分のする妄想はそういうものではない、と説得力がないけれども言い訳してみるのだ。

僕の場合、どちらかといえば、おおよそ現実離れた空想を頭に思い描くのではない。頭の中で、自分が数々のモンスターをばっさばっさと切り裂いていくような勇者というわけでもない。ある日突然、自分がどうしようもないくらい的美貌を手に入れ、女の子に囲まれてウハウハのハーレムを築きあげるようなイケメンでもない。ただ単に、こういう場面で、こうなったらどうなるんだろう、と日常の延長線上の想像をするのだ。

たとえば、妄想の中での僕は、モテモテ君や勇者様といったありえない設定は用いない。ただ、かわいい女の子一人と、ほのぼのと軽くいちゃいちゃして、それでも人生すべてうまくいかないと言いたげにある程度問題も起きて、しかし結局そこはかとなくうまくいってしまふような、そんな希望を交えたような軽い妄想。

確かに女の子が空から降ってきたり、いきなりあなたはとある英雄

の末裔と言われたり、そういう設定は燃えるものがあるかもしれない。現に、三、四年前はそんな想像をして、一人ほくそえんでいる節もあつたのだ。しかし、いつからか、自分の妄想はあくまで『ありえそうな現実』の枠を超えなくなっていた。

それは大人になるにつれて現実を知って、夢のある想像ができなくなったからかも知れない。それとも、単に自分の想像力が衰えた所為か。ともかく、これだけ説明したのだから、ある程度僕の妄想の定義をわかってもらえたと思う。

話を、本題に移そう。

いや、別に僕は妄想について語りたいわけではないのだ。確かに僕は妄想が好きだし、もし僕に一般人ほどの羞恥心すら持ち合わせていなかったら、僕は胸を張って「妄想が好きなんだ」と豪語できるかもしれない。

妄想の良さはきつと青春を謳歌している高校生ならば、みんな知っているだろうけどそれでも、語りたいと思う部分はあるのだ。きつと僕らの妄想の議論は夜通し語っても尽きることはないだろう。

しかし、今僕が語りたいのはそういう部分ではないのだ。

一般的に、妄想っていうやつは自分の思い通り、自分の欲望のままに世界が存在するようにできているはずだ。そうでもないそれは妄想ではなく、ただの想像、もしくは予想に過ぎないと思っている。

昨晚、僕はいつもと同じように、妄想をベッドの中で繰り広げていた。基本的に僕の場合妄想は、くだらない授業中かもしくは一人の

とき、それと寝る前するのが常となっていた。

この日はもし彼女が出来そうになったら、という内容で妄想をしていた。だから僕は授業中に考えていた設定を再び引っ張り出して、引き続き脳内で彼女になりそうな女の子とのエンジヨイライフ所謂妄想内限定でのリア充　を繰り広げようとしていた。

設定は放課後、それまで少し仲の良かった女の子が、帰り道一緒に帰らないかと誘ってきた、というシナリオ。授業終了のチャイムで興を削がれた僕は、その日の就寝時までその妄想を取っておいた。

僕にとって妄想は本に近いものがあるかもしれない。この先は、また後に取っておこう。今これを読んでしまっただけでもない、そんな感じなのだ。もちろん台本は自分の好きなように変わってしまうけれども。

ともかく、僕は脳内でどうやってこの子と良い雰囲気になって、どう告白して付き合おうかと、内心ニヤつきながら妄想を楽しんでいた。もちろん自分の望む展開になるのだから、その思考自体は意味のない、ただのしかるべき経緯を重んじた自己満足ということになるのだが。僕はそういう現実的な設定にもこだわりを持っていたのだ。

そう、脳内の僕は百中百発成功する告白の台詞を、優柔不断に悩んでいた。

その矢先問題は起こった。

その脳内彼女（予定）が、クルマに轢かれてしまった。

僕はもちろんそんなことを望んでやいない。そんなことは当たり前で、誰も脳内で設定した彼女候補がいきなり死んでしまうなんて展開は求めていないはずだ。不幸な主人公を気取りたいのなら別だが、ともかく一切、僕はそんな展開を思い描かなかったのだ。

しかも後味の悪いことに、その時僕はクラスのある女子を妄想にご招待していた。

その設定のお陰で、僕は言葉で表現しようもない罪悪感に駆られた。自分の頭にふとよぎったクルマが、僕の横で笑っている女の子を唐突になぎ払っていったのだ。わけがわからない以前に、何を自分が望んでいたのかさえわからなくなった。そして僕は良くわからない自分の思考と展開のせいで、その夜ろくに眠れないほど気分が悪くなってしまった。

さて、話は現実に移る。まじめに話そう。

その翌日すなわち今日、その女の子が放課後、一緒に帰らないかと誘ってきた。

僕は誘われた事にもびっくりしたが、それ以上に昨日の妄想の設定に忠実すぎて驚愕した。彼女はそんなに驚かなくてもいいのに、と少し照れたように頭を掻いて、それからこちらを見つめて、視線で「結局どうなの？」と問うてきた。

もちろん僕はそれに快諾したのだ。あんな妄想の展開の後で少し気味が悪かったがそれでも、少し気になっただけで妄想にも用いられるほどの彼女からの誘いに、断る理由もなかったのだった。

彼女と横に並んで、帰路に着く。地平線に沈みかけた日差しを浴びる彼女の横顔はとても魅力的で、話が途切れ、無言のまま見つめていたら、何でそんなにじつと見るの、と照れ気味に怒られた。

僕の中には、妄想なんかじゃない、確かな恋心が芽生え始めていた。しかし反面、こんな自分、妄想を愛する至って平凡な自分が、自分の世界とはおおよそかけ離れた、クラスのアイドルになり得るような子とこんな恵まれたシチュエーションになっただけの良いのだろうか、とさえ思った。

とにかく僕はその時自分がどの道を通って帰っていたのかわからなくなるほど緊張していたし、彼女も口から出てくるのは授業や部活など、思いついたような内容ばかりで、声もこころなしに上擦っていたように思う。

端から見れば、実に初々しいカップルに見えたのではないだろうか。

ふと、彼女が僕のブラブラさせた手を握ってきた。

僕が驚いて立ち止まり、その繋いだ手と彼女の顔を交互に見つめていると、彼女ははみかみつつも上目遣いで、にっこり微笑んだ。

学校の帰り道、夕日の照らす下り坂の途中。僕と彼女はその場で固まっていた。何を言い出せばいいのかわからなくなり、二人の間に長い沈黙が横たわる。

格好としては、一步距離の開いた彼女が握手を求めてきたような格好。彼女は、頬を真っ赤にしてこちらをずっと見ている。僕の目から視線を逸らそうとせず、何か僕の答えを求めてでもいるような表情。

そんな何かを訴えているような様子の彼女から、僕は目を逸らすことも出来ず、ただただ彼女の艶やかな黒い瞳を見つめることしか出来なかった。

彼女はいつたい、僕に何を求めているんだろう、そんな野暮な事を考えつつも僕は、頬に血が上っているのを感じた。きっと澄んだオレンジの夕日に照らされてにいるもかかわらず、僕の顔は彼女から見ても負けじと真っ赤になっているように見えただろう。

多分、多分だけ彼女が僕のことを本気で好きなんじゃないかと、そんないまさらだが少し自意識過剰ともとれる考えが頭をよぎった。しかしここまでできてお前、好きじゃないわけが無いだろうと、脳内の僕は内心狂喜寸前に困惑している僕に告げる。

でも体は言うことを聞いてくれず、その喜びはまったく手足には反映しなかった。緊張だけが僕の体を微動だにしないほどこわばらせ、僕は息を唇から漏らすので精一杯だった。

僕は、必死に口を開き、裏返りそうな声で彼女の名前を呼ぼうとした。

瞬間、彼女はすさまじい勢いで僕の視界から消え去ったのだ。

目をすつと横切っていく亜麻色のさらさらした髪、夕焼けを浴びて朱色に染まった肌。目にも留まらないほどの速さで黒い鉄の塊にさらわれた彼女の体を、しかし僕はスローモーションを見ているかのように捉えることが出来た。

遅れて、耳に入る絶叫と破碎音。そして僕たちではどうすることも出来ない勢いを、軽々しく止める急ブレーキの音。

彼女の柔らかい手のひらのぬくもり、そして直撃する直前に強く握られた感触の残る僕の手は、彼女が吹っ飛んだ方向に引き伸ばされていた。ひじの関節がものすごく痛い。

「…あ、あああ」

僕の口から、情けない声が吐息混じりに漏れた。ゆっくりとしか動かない首を少女のほうに向けると、彼女は血にまみれたよくわからない格好で横たわっていた。30メートル程離れたアスファルトの上に、真っ赤な赤い花びらが落ちたように見えた。こげ茶色のうすでのカーディガン、白いYシャツの色合いは既に赤々しい液体で塗りつぶされていた。

僕は、ふつと緩んだ腿の筋肉を引き締めて、彼女に駆け寄った。もどかしい距離、足はぶるぶる震えて何度もこけそうになった。

ようやくたどり着いた彼女の横、血の海にびしゃびしゃと手を突っ込んで、彼女の体を引きずり出す。

少女はぶるぶる震えながら僕を見て、自分の状況などまるでわかってないかのように微笑んだ。

彼女の体重は恐ろしいほどに軽く、家で飼っている子猫を抱きかかえたような感触しか腕に伝えてこなかった。きつと元から華奢な彼女の体重はそこまで重くは無いはずだが、それにしても軽すぎた。

僕はここで初めて、体中を巡る血が、どれだけ体重の大部分を占めるかを思い知った。そして、死にかけの人間とはこんなにも冷たいものなのかを腕に感じた。

血に塗れた両腕は夏半ばだと言うのにひんやりとしていて、僕と彼女の体温をどどん奪っていく。

彼女は寒さと痛みに震えているように見えた。僕は彼女を抱きかかえたまま、片手で肩掛け鞆のファスナーを引き降ろし、中から部活で使ったジャージを引っ張り出して少女の体にかぶせた。

彼女は場違いなことに、君の匂いがするね、なんてのん気な事を言いながら微笑んだ。

僕の瞳には、彼女が強がっているようにしか見えなかった。

僕は、なぜ彼女がそんな顔を出せるのか不思議でたまらなくなった。そして、何で笑ってるの、痛くないの、と場違いな質問が唇の端からこぼれた。

彼女はそれには答えずに、とても悲しそうな、しかし微笑みを絶やささない、というよくわからない表情で、何かを言おうとした。

僕は必死に聞き逃げようとしたが、声があまりに小さすぎた。耳元を彼女の口に近づけると、今度はちゃんと聞き取れた。少女は震える声で、キスをしたい、とねだった。

僕は一瞬の躊躇もせず、唇を彼女の血の気の失せたそれに押し当てた。いきなり襲うひんやりとした冷たさ、むせ返るような血の臭いに思わず身を引きそうになりながらも、それでもやわらかさを失っていない唇に唇を重ね続けた。

漠然と淡い恋を募らせた。その矢先、叶った口づけがこんなに悲しいものなんて。

僕はこんなのは望んでいなかった。こんな終わり方は、あまりに悲惨すぎやしないだろうか？ そう思わざるを得なかったのだ。

しかし、残酷なことに僕は、漠然と、彼女が死に至るイメージを脳内に描いてしまったのだ。

そおつと身を離すと、彼女は心底幸せそうに、ふふつと笑った。

再び、何で、なんでそんなに笑えるのという溢れるような疑問は心の中で押し殺した。彼女の幸福に水を差すような気がしたのだ。ふと零れた涙をぬぐって、僕も笑ってみた。顔が引きつった感覚がしなかった。

少女は、目をゆっくり閉じた。

僕は、彼女の死を想像してはいけなかったのかもしれない。

吹き飛ばされた彼女の肉体は、いろいろな方向に折れ曲がり、今思えば、彼女の頭が無傷だったことが驚きだった。

僕が妄想の世界に彼女を登場させた所為で、彼女に避けようのない死を押し付けたのかもしれない。

手がぬるぬるして彼女の体を滑り落としそうになった。小柄で軽いその体を抱きしめて、刻一刻とぬくもりを失っていく彼女の感覚を必死に覚えようとした。

僕の妄想は、もしかすると避けようの無い未来なのではないだろうか。

必死に頭の中に救急車の中で必死に生き延びる彼女をイメージしようとした。そして手術は大成功、翌日には緊急治療室に入れられ、弱々しくも健気に、僕に微笑む彼女を想像しようとした。

僕は、彼女の命を奪った元凶ではないのだろうか。

しかし、いくら頭の中で考えても、妄想は雲を無理やり固めたか群像のように、次から次に掻き消えていく。彼女の死はもう変えようが無いのだと、鼓動を失った小さな体を抱えた僕は痛いほど理解していた。

救急車が目の前に止まる。白衣とヘルメットを身に着けた大人たちが、僕の腕から彼女の体を剥ぎ取っていった。

ときばきと少女を担架に載せ、よくわからないチューブを体に次々

に差ししていく光景をぼーっと見ていた僕は、救急隊員に引つ張り起こされ、そのまますがままに救急車に放り込まれた。

救急車の中では、救急隊員の人たちが延命装置を設置したり、酸素マスクを取り付け止血や注射をしたり、無理です心肺機能が蘇生しませんと泣き言を言う隊員に何とかしろと怒鳴ったり、必死に彼女を助けようと目まぐるしく動いていた。

僕は、なんとなく結末はわかっていた。

僕が彼女の小さな体を抱きしめた時点で、既に彼女からは鼓動を感じられなかったのだから。

病院に搬送されてすぐ、彼女の死亡宣告が出された。僕はそれを聞いて、ああ、やっぱりそうなのかとしか思わなかった。気が動転しているのか、それとも頭がまともに動くことを拒否しているのか。

僕は、こうなる事など本当に望んでいなかったのだ。

そんな妄想などは、本当に求めていなかったのだ。

僕は、この世界が妄想の世界なのか現実なのか、区別がつかなくなった。

僕が望んだ世界は、僕自身を置き去りにしてひとり、どこかに行ってしまった。

僕のこの妄想癖が、いったい何になるのかはわからない。

でも確実に言えることは、この日から、僕は妄想することが怖くな
った。

現実、瞳その1

* * *

しとしと雨が降り続く、残暑でむせ返るような、湿った空気を孕んだ昼下がり。急に振り出した雫はしかし穏やかで、学生服を着込んだ多くの生徒を陰鬱な雰囲気で包んでいた。

生徒が溢れかえる、住宅地の一辺に位置する小ぢんまりとした寺。ここで、ある少女の唐突な死に伴った葬式が行われていた。参拝客はほとんどが彼女の生前の友人、もしくはクラスメート、もしくは過去に付き合いのあった知り合いだった。他にまばらに見える大人たちは皆、教職関係かもしくは親族だろう。

この場所に集う多くの人たちの表情から、彼女の生前の交友関係、持ち前の性格や人柄などが伺えた。きつと誰かがこの葬式を注意深く観察していたならば、皆が皆顔を伏せ、黙って彼女の遺影を視線でなぞっては俯く、の繰り返しだと気づいただろう。

辺りには少女の死を悼みすすり泣く声と、雨の地面を打つ音のみだけが繰り返しこだまするように響いていた。

遺影には、明るくカメラに向かって微笑みかけている彼女。その写真の下には、桐製の箱に収められた亡骸があった。ただしこの度の葬式はあまりに参拝する生徒が多かったため、家族や仲の良かった友人を慮って箱を閉めて外からは全く見えないようになっていた。

ふと、ふらふらと会場から出てくる少年の姿があった。長めのアシンメトリーに整えられた前髪は目蓋に深く被さり、学校指定の詰襟

の首元に垂れる同じく長い襟足は少し外側に跳ねている。全体的に陰鬱な雰囲気をもった少年の表情は、悲しみに暮れる、と言うよりはあつけにとられて何も考えられない人間のそれに近かった。

そのままおぼつきの無い足取りで立ち去ろうとする少年を引き止めるように、一人の少女が後を追い後ろから声をかけた。

「日向先輩」

その声で少年はゆっくりと顔を後ろに向けた。少し顔に驚きの表情を含ませ、しかしすぐに元の呆けた顔に戻る少年を痛々しげな目で見つめながら、少女は少し、咎めるような口調で少年に問うた。

「納骨、行かないんですか」

その少女は彼が驚くほど無理はないほどに、遺影に移るあの少女に似ていた。

しかし日向と呼ばれた少年を見つめる彼女の容姿は、亡くなった少女とは僅かな相違点があった。目元が少し釣りあがり、髪は二十センチほど長い。そして何より、写真からも感じ取れる活発さがその少女からは感じられなかった。どちらかと言えば、亡くなったあの少女を内気で人見知りにしたら、こんな子になるだろう、そんな容姿を彼女は持っていた。

彼女も周りの参拝する生徒と同じく、少年と同じ高校の制服を着ていた。片手には、黒地でほんの少しに抑えられたレースの付いた傘を携えている。もう片手にはコンビニなどでも買える透明なビニール生地のアっばい傘が握られている。どうやら少女は彼に傘を渡しにきたようでもあった。

「納骨か。そうだね、行つてあげなきゃいけないな」

一方少年はまるで独り言を呟くように彼女の問いに答え、緩慢な動きで踵を返して寺の門の前で立ち止まった。そしてそのまま壁に体を寄りかけて俯いた。その姿はまるで、来ない誰かをこの場所で待っているように少女には見えた。

「悪いね、ヒナザクラさん。もし火葬場に行く時間になったなら、呼びに来てくれないか。僕は、ここで一休みしていくよ」

「お別れはもういいんですか」

「…よくわからないんだ」

雛桜、と呼ばれた少女はその回答に不満を示すように、少年の顔から目をそらした。そして彼女は彼が言っているよくわからない、という言葉はこの場合、いったい何に對して言っているのか、と暫し思案した。そして、

「よくわからないって言うのは、姉が死んだ実感が沸かないってことですか」

と、突き放すような声色で再び問うのだった。

「いや、お姉さん　茅摘が死んだのは痛いほど実感してるよ。ただ、何でこうなったのかわかって、考えてたんだ」

少年はまるで非が自分にあるかのような表情で、悲しさと悔しさが入り混じった眼差しをアスファルトに向けた。雛桜は、彼の表情を見て暫し戸惑った。どういふ経緯で彼がそう思いつめているのか解

らなかつたが、やがて彼も自分の姉の死を心から悼んでいる内の人なのだ結論付けた。

少女は握っていた傘を無言で少年に突きつけたが、少年はそれを見ても力なく首を横に振るだけだった。少女は少しの間その場に立ち尽くしていたが、やがて早足に再び会場に戻ってしまった。彼女の瞳には微かに最初とは違う、心配と彼を気遣うような色が含まれていたが、終始俯いていた少年は気づく事はなかった。

少年は湿気を含んで重たくなった前髪を横に掻きあげ、そのまま絶える事無く雨を降り注がせる空を仰いだ。

少女 茅摘葵が少年 日向瞳の目の前で命を落としたのが昨日の夕方。

そのまま冷たくなった葵の体を、霊安室で呆然と見下ろしていると彼女の両親が駆け寄ってきて跳ね飛ばされたのを覚えている。

彼女の父親は葵の亡骸に必死に話し掛け、やがて反応が決して返ってこないことを悟るとこちらに鬼のような形相で詰め寄り、うちの娘を、うちの娘をとうわ言のように繰り返しながら、瞳の襟元を掴んで離さないのだった。いったい彼は何を言いたかったのか、娘を殺したのは自分だと言いたいのか、なぜ助けてやらなかったと糾弾したかったのか、果たして瞳は最後までわからなかった。彼に出来ることはまったく無かった。

瞳には彼女の両親を慰めるなんて大それたことを出来るような勇氣は持ち合わせていなかったし、何よりそんなことは自分の得にはな

らないと、少々冷めた気持ちだった。もちろんこの娘を失った二人を可哀想だとは思ったが、それよりも自分の身に起こったわけのわからない事を整理するので精一杯だった。

しかし瞳の頭の中はいつこうにクリアにはならなかった。胸ぐらを掴まれても冷静でいられるほど落ち着いてはいた。どちらかといえれば彼は、そんなどうでもいい事に感情を割り裂いて反応することが煩わしいといった風だったが、どちらにしる瞳は物事をきっちりと考えて整理できるほどに落ち着きを取り戻していた。

「ちよ、ちよつと、あなた！日向さんは悪くないはずよ、ええ、決してそんなことは、しないし、しようとも思わないはず…だから…やめて頂戴」

母親らしき中年の女性が横から胸ぐらを掴んでいた男性を止めにかかった。瞳は、彼女とは面識が無いはずなのに、なぜこの人は僕のことを知っているのだろう、そしてなぜ僕のことをそういう風に行き切れるのだろうと疑問に思った。しかし、男性が手を離し僕に出て行け、と言った事で、その疑問はすつと頭のどこかに行ってしまった。

この事故で、彼は殺人容疑をかけられていた。容疑と言ってしまつたら少し語弊が残るかもしれない。それは、この事件の真相を知る人間は葵を撥ねた車の運転手、瞳、それと葵の三人だけで、その容疑は単に可能性からよるものだったからだ。

「日向、ひとみ君、と言うのかな？少し、話を聞きたいんだが」

「それ、瞳と書いてアキラ、と読むんです」

瞳が霊安室前の廊下で立ち呆けていると、夏だというのにきつちりした黒のスーツで全身を包んだ初老の男性が彼に話しかけてきた。男の纏う雰囲気はかなり硬めで、明らかに人を問い詰める事を職業としたような、そんな相貌だった。イメージで言うと、裁判官と言われるとすんなりと信じてしまいそうになる、そう表現できる。頭髪には白髪が混じり、威圧的な目はどこかすべてを見下しているように見えた。その厳かな左目には今時珍しい片眼鏡がはめられていた。それを見た僕の視線に気づいたのか、彼は視力は良いのに、片目だけ乱視が入っているのだと言った。

「そうか、瞳君か。名前を間違えてすまなかつたな。何しろ生まれてこの方現代国語の点数は、高得点を取ったためしがない」

そう言いつつも男は、少しも申し訳なさそうな表情ではなかった。そのままジャケットの外側の、膨らんだポケットの中をさがささと探り、やがて手のひらに収まるサイズの手帳を取り出し開いてこちらに向けた。

「警察だ」

「知ってます」

こんな状況で、彼に話しかける厳つい顔をしたスーツの面識の無い人間と言ったら、そのテの役職の人間しかいないと彼は思った。

「話が早いな。悪いが、おじさんとちょっと落ち着ける所まで行くか」

瞳は、声をかける場所と彼の表情が違えば大変なお誘いになるんだ

ろつなあ、と彼自身でも心底どうでもいいと思いつつ考えたのだ
た。

男は宮島義則、と名乗った。彼から下された言葉は「重要参考人」というドラマの中でしか聞かない単語。宮島は、病院の外に設けられた公園に似た入院患者用に作られた憩いの広場で、瞳に彼の現在の立場をそう告げた。重要参考人はこの場合、嫌疑がはっきりしない被疑者、つまり容疑者の一歩手前の状態。それは、彼は証拠と証言次第では、茅摘葵を殺した張本人となる事を意味していた。

しかし瞳は、ああ、そうなんだと納得した。こつもすんなり、あつさりを受け入れられたのは、彼の持ち前のあつさりした考えからもあつたのだが、今回は状況の悪さにも要因があつた。

「仕方のないことだということとはわかってくれるだろうね」

声色は瞳を気遣うようなそれだったが、眼差しは変わらず相手を追及するような光を保ち続けていた。

「まだ茅摘…さんを轢いた車は見つかっていないんですか」

「ああ、そうだね。もつとも、見つかったからと言ってその車の運転手が見つかるかはどうかかわからんがね」

この事故、もとい事件のもう一人の重要参考人であるはずの、葵を撥ねた車の運転手は彼女を轢いた直後、どこかに走り去ってしまった。これでは、運転手の方に非があるのか、それとも瞳の方に非があるのかが判断できない。

警察は事件に対する多種多様の考えを、それが思い浮かんだ時点で、

検証しなければ気が済まない職業なのだ。たとえ周囲の人間が「あの人はそんなことをするような人ではない」と訴えたところで、聞く耳を持たないのが常だ。信用に値するのは動かぬ証拠、鑑識の調べ、それと自分の考えだろう。

それは本来ならば責められることでは無い。それが警察の仕事に他ならないからだ。しかし今の瞳にとってそれはただ鬱陶しく、自分たちの直面した事件をあざ笑っているかのようにはしか思えなかった。現在瞳を調べているのは、自分が葵を突き飛ばして車に轢かせた、という可能性が少なからずあるからだろう、と瞳は思考した。

「君は彼女　茅摘葵さんと帰路に着いていた、その途中車がかなのりのスピードでつつ込んできて、彼

女は轢かれてしまった、それでいいね。　その時の彼女と君の距離はどのくらいだったんだい？あ、そんなに具体的でなくとも良いから」

宮島は瞳が答えやすいようにと、茶化したり、冗談を交えて話したりすることが多かった。人の死について質問しているっていうのに、そんな風にふざけて聞いてくるというのは、人間としてどうなんだろうか、と瞳はこの警察と名乗る男に怒りを覚えた。

「そんなに距離は離れていませんでしたけど、その時は少し一歩引いた状態で、向かい合って立っていました。彼女は道路側で、僕が歩道側でした。そんなに歩道からは逸れていませんでした。実際：彼女、茅摘は白線の上辺りを歩いていましたように思います」

瞳はあの鮮明な記憶を辿り、彼が俯いた時に、彼女の足元にアスファルトにまっすぐに伸びる白線が見えた事を思い出した。そして思い出したと同時に、彼女の消え行くような微笑みが脳裏に蘇り、不

意に瞳は泣きたくなった。

「ああね。そうか、なら車が彼女を轢いたってのは、考えてみれば少しおかしいのかもしれないな。彼女が身を乗り出すか、車がもう意図的に、もしくは運転ミスでもしない限り彼女を轢くなんて事はありえないんだから」

瞳はふと、自分は知らず自分自身を追い詰めているような気がした。もしかしたらお前は彼女を道路側に突き飛ばしたんじゃないのか、と宮島に暗に聞かれているような気がして、瞳は寒気を覚えた。

「でも少し引つ掛かってね、車って音出るでしょ、普通は。君や茅摘葵さんはその近づいてくる音に気づかなかったのかなあって、少し気になるな」

「……どちらもそのときしていた話に集中していたんだと思います。でももし、もし車が通っても、自分たちに当たるかどうかなんて考えもしなかつたんです。日常で歩道側に車が突っ込んでくるなんてそんなこと、そうそうないですから」

彼女は理不尽な死に方をして、自分は理不尽に罪を被せられようとしているかも知れない。彼は自分にしつこく、そしていやらしく質問を繰り返す宮島に対して、誰に対してなのかわからない怒りと、どこにぶつけていいのかわからない遣る瀬無さを覚えた。

「少し冷静過ぎでないかい？ちよつとあんまりショックを受けてないような気もするんだが」

「彼女とは、実を言うとあまり話す方じゃなかったんです。実際、二人つきりでもとにも会話をしたのは今回を含めて数えるほどなん

です。…よくわからないんです、実際は。何でこうなってるのか、何がどうなってるのか、自分はどう思ってるのか」

「そうか、いろいろとぶしつけな質問をして悪かった。申し訳ない」
宮島はやっぱり申し訳無いなどの気持ちは露ほども思っていないような表情だった。そのまままた聞きに来るかもしれない、と瞳に言い残して彼は、すっかり日の暮れた暗闇の中に去っていった。

それから彼は、ごたついた病院内から逃げるように帰った。葵の亡骸が安置された暗い箱部屋は、とても中に入れるような雰囲気ではなかった。

彼女の両親のすすり泣く声が、瞳の頭から消えず、紙を僅かに燃やした後の焦げ跡のように、いつまでも頭の中に残っていた。

瞳は帰宅する途中いろんな人とすれ違ったが、彼はそれが誰だなんて把握もしていなかったし、する気も起きなかった。

ただ俯いて、前方から来る人の顔を見ないようにしながら、自宅の玄関までのそう遠くない道のりをただひたすらに歩いて帰った。彼はその家と病院の距離が、徒歩で隣の町に出向くほどの距離に感じた。

足を動かせば動かすほど、彼の後ろから何か足を引き張っているような気分になった。そして、自分は気づけば知らないところに来て、顔を上げれば見たことも無い寂れた町で、一人取り残されたまま閉じ込められて一生を終えるというようなビジョンが頭に浮かび、瞳は急に吐きそうになった。

もしかすると、この妄想は現実起こりえることなのかもしれない。

実際に後日、何故か自分は見知らぬ町に赴き、どうする事も出来ずに公園で惨めに餓死するかもしれない。

少女の妄想の中の儂げな微笑みと、彼女の死ぬ前に見せた血に塗れた微笑みが、彼の頭で重なって写った。

自分の妄想が一体、何なのか、何を映し出して何を示しているのかは未だにわからなかった。

帰って血相を変えた母親の質問をろくに聞かずに受け流した後、ベッドの上に半ば倒れこむように寝転がった。くしゃくしゃに丸めてあったタオルケットを広げ、その身を包み込んだが結局ろくに眠れなかった。

頭の中はぐるぐると色々なものが混ぜ合わさっていた。彼女の透き通ってしまいそうな真っ白い肌、教室でころころと笑う声、冷たくひんやりとした唇、血の海に染まったぼろぼろのカーディガン、記憶の中で彼女が見せる微笑み、夕焼けに染まった軽く上気した頬、つないだ手の温かさ、どれが過去でどれが今か、どれが妄想でどれが現実かわからなくなった。

人間は、なんてあいまいなんだろう。一人が死んだだけで、現実と幻想の区別がつかなくなるなんて。

彼は軽く寝ては起きてそんなことをずっと考え、また寝て浅い眠りが覚めるとまた答えの出ない問いを繰り返す、そんなことを繰り返し続けた。ふといきなり、ライムグリーン調に整えられた、今は夜明け前で薄暗い部屋に、鋭い着信音が鳴り響いた。ロックなメロディーに乗せた力強い女性ボーカルが負けじと映える。ほんの少し前に引退したバンドのその曲で目が覚めた瞳は、完全には覚醒しなかった頭脳を以て携帯の背面ディスプレイを見る。彼ははっと息を吞

んだ。途端に飛び上がりそうなほどに心臓が高鳴り始めた。

その小さな液晶にははつきりと『茅摘 葵』と映し出されていた。

なぜ彼女が電話をかけることが出来たのだろう、彼女の遺体は今も病院にあるはず、彼女は自分の目の前で死んだじゃないか、では何故彼女名義で電話がかかってくるんだ、数々の疑問が頭に浮かんではすぐに消えた。

とにかく電話に出なくては、そう思って片手で携帯を開き、震える指をもどかしそうに動かしながら、通話ボタンを押した。

「…もしもし」

『…あの、妹です。茅摘葵の妹。もし驚かせてしまったならばごめんなさい』

「十分驚いた。死ぬかと思った」

当たり前の結末に、瞳は妄想とは確実に違う現実を味合わされた気分になった。電話に出るまでは確実にあったはずの焦り、驚き、罪悪感や虚脱感が一気に体から抜け落ちたような気がした。その時だけは、彼は葵が死ぬ前の彼に戻っていた。

『……本当にごめんなさい。姉の葬式のことについてお知らせしようと思っ』

「そっか、ありがとう」

彼女の声は、葵がのどを痛めて掠れた時のような声だった。そして、

悲しみというよりは、虚脱感を多く含んでいた。瞳は彼女の声を、少しだけ機械的な声だ、と思った。彼女は努めて事務的に対応しようとしているようだった。

『通夜は昨晚、身内で既に済ませました。葬式は今日の午後二時に創来寺で行います。来られますか』

「ああ、そのつもりだよ。えっと、名前は」

『ヒナザクラです』

「ヒナザクラさん、ありがとう。それともし他の人に、僕のようにこの電話で連絡を回そうとしてるならば、やめたほうがいい。是非家の電話を使ってくれ」

『…わかりました。朝早くにごめんなさいでした。失礼します』

瞳は、耳をスピーカーに当てたまま彼女が受話器を置くのを待った。しかし、一向に通話の切れる音はしない。どうやら、向こうも瞳が通話終了するのを待っているらしかった。仕方なく、瞳は携帯を閉じる。

背面に表示された通話時間は僅か二分に満たなかった。遅れて表示される時刻は朝の五時十分前。確かに、朝早く過ぎた。元々眠れなかったので別に迷惑ということもないが、何かこの時間でないと電話出来ない事情があったのだろうか。

瞳はのろのろと、上半身を起こして、横に放り投げていた通学用のメッセンジャーバッグを開けた。

すると少し酸っぱいような、酸化した鉄のような匂いが瞳の鼻を掠めた。見ると、葵の血を吸って真っ赤に染まったYシャツが、ビニール袋に包まれて放り込まれていた。瞳は、そういえば病院に連行された際に、救急隊員の人に代えとして備え付けられていた服を無理やり着せられたような記憶があった。

彼はその赤と白のツートンカラーになった服を取り出す。驚いたことに、未だ生乾きだった。血液をたっぷり吸い込み、ずっと半密閉されたビニール袋とバッグの中に入れられていたのだから、当たり前なのかもしれない。

瞳はまだそこに葵がいるような気がして、Yシャツをそっと抱きしめた。そして、目を覆った赤い布を、ちろりと舐めた。少し湿り気を帯びたそれからは、やっぱり血特有の鉄のさびたような味がした。

ほろりと、ふいに瞳の眼から涙がこぼれた。その事に、彼自身が一番驚いた。それまで抱いていた、彼女が死ぬ前に抱いていた淡い感情と、今溢れそうなこの、彼女が死んでからのこの想いは、明らかに度が違っていた。

どう違うのかは、瞳にはよくわからなかったが、少なくとも違うことだけはわかった。

それから、泣き疲れたかのようにどろどろの睡魔の中に埋もれ、起きて手早く学生服を着込み、指定された創来寺に着いたのは告げられた時間よりも少し早い一時四十五分。一足先にお香をあげ、次々と入場する生徒をボーッと見ていたのがつい先程の事だった。

雨足が強くなってきた。心地よいと感じた雨は力を強くし、痛いほど額を叩く雨粒に沿って、前髪が再び目に覆い被さってくる。

段々横に払うのも面倒くさくなり、瞳はそのまま顔を下に向けた。張り付いた前髪が重力に従い、瞳の目の前に暖簾の様に垂れ下がる。しずくを垂らした髪越しに、ちょうどタオルを携えた亡き少女の妹がこちらに小走りで向かってくるのが見えた。

「火葬場行きます。とりあえず、車に乗るんで拭いてください、後風邪を引きます」

「ありがとう。…もうみんな解散しているのか？」

「いいえ、学校の皆さんは寺内の講堂で雨宿りがてらにお話をします」

「そっか。じゃあ行くよ」

会場に入ると、あれだけ視界を埋めていた黒い制服はほんのまばらになっていた。何人か見知った顔もいたが、瞳は顔を向ける彼らを無視して俯いた。俯いたまま、黙って少女の後ろについて行った。寺の裏手に出たところで、少女が先に車に入っていて、と指示を出した。

「姉が入った後に車に入ると、嫌が応にも目立ちますから」

そう説明してくれた後、彼女はドアを閉めてまたどこかへと向かってしまった。ワゴン車ほどの広さを持つ車の中で一人、瞳は先程受け取ったタオルで髪を拭っていた。詰襟を脱ぎ、膝の上に乗せる。途端にストラップスが膝に張り付き、ぺたぺたと気持ち悪い感覚がし

た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6161k/>

妄想リアリティ

2010年10月11日04時25分発行